# No.23 たにがしらっ子だより

令和４年10月28日(金)
金丸恵美子

ひとりひとりに寄り添うとは…

朝から夕方まで、いろいろな子ども達が事務所にやってきます。お母さんと離れがたい子どもやけんかをした子ども、体調が悪い子ども、怪我をした子ども。捕まえた虫や作ったものを得意げに見せに来る子どもなど…。自分の言い分を一方的に話したり、聞いてもらったり、時には事務室でゆっくりと過ごした子ども達は気持ちが落ち着いてまた、いつもの遊びに戻っていきます。学校で言えば、『保健室』。癒されたり心が元気になるような、事務室はそんな場所でありたいと思っています。

先日、昼寝から覚めてすぐに事務室にやってきたＡ君。30 分程絵本を見たりおしゃべりをして過ごしました。３時のおやつの時間を見計らい、以上児クラスに送っていきました。丁度お集まりの時間です。子ども達は担任の前にこじんまりと座っていました。部屋の東側のきりんクラスも西側のぞうクラスも読み聞かせ中でした。私達が入室したことに気づいて「えんちょう…」と手を振る子や目でサインを送ってくる子ども達。しかし、こちらに歩み寄りその場から離れる子どもは誰一人いません。チラ見をしただけでまた、絵本の世界に入っていきました。

肝心のＡ君は、既にスタンバイされている配膳台から自分のトレーに牛乳とふくれ菓子を取って「いただきます」と食べ始めました。私はこの間ずっとＡ君の横にいて様子を見ていました。

絵本を見ている２クラスの子ども達は、誰一人Ａ君をとがめる子どももいません。ましてや自分も食べたいと言い出す子どももいません。ちらっとＡ君をみた子ども達は、ブレることなく担任の話を聞いていました。

子どもひとりひとりに合わせるとは、このようなことを言うのではないでしょうか？保育界には今だ、みんなと同じ行動をとらないと問題視する風潮があります。みんな一緒の保育や一斉授業で子ども時代を過ごした私達は、そのやり方や考え方が染み込んでいるのでしょう。だから集団で動かそうとするし、その中に入り難い人を特別視してしまう。

『ひとりだけが特別だとわがままになる』以前の私はそう思っていました。保育者主導から子どもが主体の教育保育に転換してからたくさんのことを学び気づかされ、過去の自分が恥ずかしくなります。大げさかもしれませんが、私自身の子ども観や保育観はあの頃と 180 度変わりました。時々、保育者主導時代の自分が出ないように自分を律しています。

園にはそれぞれに個性や特徴のある子ども達がたくさんいます。その日、その時で子どもは体調や気持ちが変わることは日常茶飯事です。そのような子ども達のひとりひとりの気持ちや状態に合わせることが、より丁寧な私達の関わり方であることを肝に命じながら子ども達に寄り添っていきたいと思います。

ひとりひとりに寄り添うとは…②

先日の『わんぱくフェスティバル』は、子ども達のいろいろな表情を見ることができました。１部の２歳児、３ 歳児(さくら、ひまわり組)さんは、親子で参加されるところもありほっこりしながら見方でした。親目線では、ひとりで参加して欲しい思いもあることでしょう。しかし、側にお父さんやお母さんがいてくださることは、子ども達にとって安心なことなのです。

**👆に続いて…、以前の私なら…。**「3 歳児は運動会にひとりで参加する」が普通。それも『泣かないで…』がついていました。泣く子どもを保護者から引き離して並ばせるのがあたりまえ。今なら考えられません。練習漬けの毎日。何故なら小さくとも集団で動くことが美徳とされていたからです。

4.5 歳児(ゆり、すみれ組)のリレーで、再勝負を提案しましたが１位でゴールした、きりんクラスから「もうしない…」の声が出ました。これまで、何十回とリレーを見てきましたが、再勝負を拒否されたてのは初めてでした。慌てて走りたい子どもだけでスタートした次第です。もしかしたら過去の子ども達も「したくない」と言っていたかもしれないですね。それに私達が気づこうともしなかったのかも…。

また、競技に参加せずともみんなの様子を園児待機席から見ている子どもさんもいました。競技ごとに誘いましたが、余計なお世話でした。「笑顔で応援してたよ」と横にいた上司の言葉。声も出ていたそうです。みんなと同じを強いるのではなく、その子どもなりの参加の仕方が保障される、そんな運動会(行事)が理想と考えます。こども園の時代は、多様な社会を生きていく基礎の時期です。自分とは違う考えや思いを受け入れたり認めたりできる子どもを育てていくことが私達保育者の使命だと思います。

私自身の保育観が変われたのは、これまで関わってきたたくさんの子ども達のおかげです。